

賛美の条件

詩篇40:1～5



指揮者のために。ダビデの賛歌

40:1 私は切なる思いで主を待ち望んだ。主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、
40:2 私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巖の上に置き、私の歩みを確かにされた。
40:3 主は、私の口に、新しい歌、われらの神への賛美を授けられた。多くの者は見、そして恐れ、主に信頼しよう。
40:4 幸いなことよ。主に信頼し、高ぶる者や、偽りに陥る者たちのほうに向かなかった、その人は。
40:5 わが神、主よ。あなたがなさった奇しいわざと、私たちへの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語っても、それは多くて述べ尽くせません。



賛美者の資格

もし、賛美が生ける神様の臨在の前でなされる務めであるなら、いったい誰が、彼に向かって喜びの声をあげる資格を持っているのだろうか。聖書に登場する最初の歌い手と弾き手は、ダビデ王によって選ばれた。彼はこのために、明確な資格を指示した。

祭司の家系

1 歴代誌9:33によれば、彼らはレビ人の一族のかしらでなければならなかった。その意味は、音楽にたずさわる者は祭司の家族の者でなければならない、ということです。さらに 1 歴代誌23:3によると30歳以上の者と指示した。

新約の祭司

しかし旧約聖書は、しばしば新約聖書の光に照らしてその解釈を求める必要がある。

黙示録1:5～6イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。

キリストによって罪が贖われた者

私たちは、自分自身を祭司と呼ぶことに抵抗を感じるが、黙示録1:5～6を読むと、誰でもその罪が赦された者は祭司である、と書かれている。もはや、地上の家系や年令がどうであるかは問題ではなく、私たちを愛してくださった主イエス・キリストの血によって購われた者は皆、祭司であると書かれている。

詩篇40:2 私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巖の上に置き、私の歩みを確かにされた。

40:3 主は、私の口に、新しい歌、われらの神への賛美を授けられた。多くの者は見、そして恐れ、主に信頼しよう。

もし私たちに、罪から贖われているという確信があるなら、私たちは賛美の務めをする者の第一の条件を満たしている、と言えるでしょう。



従う心から生まれる賛美

さらにもう二つの資格はとても大切である。これらも旧約聖書の中に書かれており、新約聖書の中に、その完全な意味が説明されている。

アモス書5:21～24は、賛美についての大切な聖句として知られている。

アモス書5:21～24 わたしはあなたがたの祭りを憎み、退ける。あなたがたのきよめの集会のときのかおりも、わたしは、かぎたくない。…あなたがたの歌の騒ぎを、わたしから遠ざけよ。わたしはあなたがたの琴の音を聞きたくない。公義を水のように、正義をいつも水の流れる川のように、流れさせよ。

これはかなり厳しい表現である。この個所から、贖われただけでは十分ではない、ということが分かる。神様は、私たちの賛美が神に聞き従う心から生まれてくることを願っておられる。

神に従って歩む道を一步一步

神様は、汚れた心から生まれる歌を喜ばれない。この点において、毎日毎日私たちは、救いの泉（**イザヤ12:3**）から赦しの水を、喜びもって汲みあげながら、神に従う道を一步一步あゆむ者でなければならない。

献げる心から生まれる賛美

もう一つの資格は、堅い決意（一つ心）である。しばしば、ダビデは「**わが魂よ、主をほめよ。私のうちのすべてのものよ**」と歌った。一つ心とは、完全に主に委ねきった姿を表わしている。

全焼のいけにえ

特にこれは旧約聖書の中では、全焼のいけにえということにおいて表わされている。

この全焼のいけにえでは、動物の全てが火によって焼かれた。これは十字架において献げられた**完全な「いけにえ」**を表わしているが、また神にのみ完全に献げきって従うクリスチャンの姿でもある。

しばしば、私たちはこの決断をすることを恐れる。

自分のために、これだけは取っておこう……という誘惑に駆られる。しかし、このように全を献げきっていない器からは、**全き賛美**は決して生まれてこない。



神に完全に明け渡して従う

2 歴代誌29:27 ヒゼキヤは全焼のいけにえを、祭壇でささげるよう命じた。全焼のいけにえをささげ始めた時に、主の歌が始まり、ラッパがイスラエルの王ダビデの楽器とともに鳴り始めた。

29:28 全集団は伏し拝み、歌うたいは歌い、ラッパ手はラッパを吹き鳴らした。これらはみな、全焼のいけにえが終わるまで、続いた。

私たちは、この霊的順位を無視することは決してできない。真の賛美、喜びの心は、神に完全に明け渡して従う人々の心から生まれてくるのである。

大いなる喜びを生み出す場所

全焼のいけにえを献げる祭壇は、決して悲壮な場所ではなく、むしろこれこそ、大いなる喜びと賛美を生み出す場所であることを忘れないようにしましょう。私たちは、主への賛美を献げる資格のある者であろうか。

